



特集

1号館改修工事について

新施設「都留フィールド・ミュージアム（仮称）」着工
副学長就任

都留文科大学入学式／新教員紹介／学外研究報告
就職状況報告／学生による授業アンケートの結果から
入試状況報告／文大だより／ぶんだい堂



都留文科大学入学式

——今年の入学者は931名

学 長 祝 辞

都留文科大学 学長 加藤 敦子



新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。都留文科大学の教員・職員を代表して、みなさんのご入学を心よりお祝い申し上げます。また、ご家族の皆様にも心よりお慶びを申し上げます。

2020年初めから世界中に広がった新型コロナウイルスの感染は、まだ完全に終息したわけではありませんが、昨年度から大学における活動は、コロナ以前とほぼ同じ水準で行えるようになりました。キャンパスで自由に学び、部活・サークル・バイトに励むといった、都留での豊かなキャンパスライフはもちろん、海外への留学や語学研修も再開しています。本学でみなさんが充実した大学生活を送ることができるように、教職員一同、全力でみなさんを支援していきます。

都留文科大学は、1953年に設立された山梨県立臨時教員養成所から始まりました。第二次世界大戦後の、特に地方での深刻な教員不足に対応するためにつくられた、臨時の教員養成所でした。1955年、教員養成所が都留市立の短期大学となり、さらに4年制の都留文科大学となって今に至ります。来年2025年には短期大学創立から70周年を迎えますが、本学がそのルーツから、教員養成という日本の将来を担う子どもたちを育てるための人材育成を目的としていたこと、また、都留

市の市立大学として創設されたこと、この2点は今も都留文科大学の根幹です。今日から都留文科大学の学生となったみなさんにも、ぜひ覚えておいてほしいと思っています。

さて、今日はここでみなさんに、都留文科大学で何を学んでほしいか、どう学んでほしいかをお話したいと思います。

この4月、みなさんの入学と同時に、本学では学部・学科を改編し、新しいカリキュラムをスタートさせました。カリキュラムとは、みなさんがこの大学で、学びの目標を達成するために何をどのように学ぶかを定めた総合的な計画です。今年度から始まる新しいカリキュラムでは、みなさんが所属する各学科の専門分野をこれまで以上に効果的に、体系的・段階的に学ぶことができるようにしました。一方で、専門分野について必ず学ばなくてはならない必修の内容を厳選し、みなさんが自分の興味関心に応じて、また、将来のキャリアを見据えて、幅広く選択的に学ぶことができるようにしました。新しく設置した副専攻プログラムでは、学科の枠をこえて幅広く実践的に学ぶコースも用意しています。

つまり、新しいカリキュラムで、みなさんは2つの方向へ成長することが求められています。1つは、自分の専門分野について、体系的

に学び、必要な知識や能力を身につけること。もう1つは、自分の興味関心や将来のキャリアを考えて、学科や専門分野の枠をこえて、何を学ぶか自分で選択し、幅広い知識や実践的な能力を身につけること、です。

なぜこのようなカリキュラムなのでしょう。

今からおよそ10年前、2013年にオックスフォード大学の研究者マイケル・オズボーンが発表した「雇用の未来 (THE FUTURE OF EMPLOYMENT)」という論文は世界中に大きな衝撃を与えました。オズボーンは702の職種について、コンピュータ化がどのような影響を与えるかを分析し、702のうち404の職種が10年後に50%以上の確率でなくなる、コンピュータにとって代わられる、と予測しました。その後、コンピュータや人工知能AIによって代わられる職業の研究はブームとなり、日本での雇用の未来も論じられてきました。みなさんもそうした話を聞いたことがあるかもしれません。自分の仕事、自分が将来就こうと考えている仕事が10年後、20年後にはコンピュータにとって代わられ、なくなっているかもしれないというのは深刻な話です。

この論文の発表から10年が経ち、オズボーンが80%～90%の確率でなくなると予測した職業



が実際になくなっているかという
と、必ずしもそうではなさそうです。
しかし、ちょうど10年後の
昨年にはChatGPTを始めとする
生成系AIが一般にも広く普及し、
改めてAIが人間の仕事に与える
影響が注目されました。これ
から皆さんは、さらに高度に発達
していくコンピュータやAIとも
に社会で生きていくことになり
ます。そこで人間は、コンピュータ
やAIにはできないことをする
ことが求められます。それはどの
ようなことなのでしょう。オズボーン
は、コンピュータ化される可能性が
低いのは、「創造的で社会的な知性
(creative and social intelligence)」
が求められるような業務であるとし
ました。10年後の現在も、AIが苦
手な領域は、クリエイティブなこと、
人の感情に関わる共感性が必要な
ことであると考えられています。

では、オズボーンの言う「創造
的で社会的な知性」とは何でしょ
うか。

都留文科大学に医学部はありま
せんが、医者仕事を例として考
えてみましょう。

医者は、医学の知識をもとに、
患者の症状の原因となる病気を特
定して診断を下します。これだけ
であれば、AIでもある程度まで
可能です。実際に現在、AIもか
なりの確率で適切な診断ができる
ようになってきています。

では、AIにはできないけれど、
人間の医者にはできることは何
でしょうか。それは、患者の何気
ない一言やふとした仕草に鋭く
気がつき、それを手がかりとして
病気を見つけ出すということです。
これは経験を積んだ優れた医者が
実際にやっていることです。

患者との対話・コミュニケーション

ションを通して、病気を突き止
める手がかりに気づく、何気ない
一言やふとした仕草を病気と結
びつけて、教科書通りでない飛
躍のある気づき、ひらめきを得
て判断する。ここには、オズボ
ーンの言う「創造的で社会的な
知性」が働いています。「創造
的で社会的な知性」は課題解決
に必要な知性なのです。

新たな気づきは、しばしば、他
者との対話、コミュニケーション
や、共同作業、コラボレーション
を通して得られます。また、一見
無関係と思われるものを気づき
やひらめきによって結びつける
というのは、クリエイティブな
思考です。ひらめきと言うと、
根拠のない直感、知識や教養を
必要としないセンスと思われが
ちですが、鋭い気づきやひらめ
きの裏には、膨大、かつ体系的
で確かな知識、幅広い豊かな
教養があります。クリエイティブ
な思考には体系的な知識が必要
であり、新たな気づきには他
者とのコミュニケーション、コ
ラボレーションが有効なのです。

カリキュラムの話に戻しまし
ょう。

専門分野について体系的な知
識や能力を身につけること、ま
た、専門分野の枠にとらわれず
幅広い知識や実践的な能力を
身につけること。これらはみな
さんの「創造的で社会的な知
性」を育て、磨くためのカリ
キュラムです。

昨年四月にオープンしたTHMC
「都留ヒューマニティーズセン
ター」は、言語・文学・教育・
歴史・思想・政治・社会など
広範に及ぶ人文学、ヒューマ
ニティーズの学問領域、都留
文科大学の「文科」という言葉
に託された思いを意識して、
ヒューマニティーズセンター
と命名された校舎です。ここ

では最先端のデジタル機器を
備えて、プログラミングやデジ
タルコンテンツの作成といった
ICT教育、DX(デジタルトランス
フォーメーション)教育を推進
し、文系理系の枠を越えた学
びを実践しています。また、大
学が70周年を迎える来年度
には、都留市と連携した新し
い施設が完成する予定です。
ここは、学生、教職員、地域
の子どもたちや高齢者など、
多様な人たちがコミュニケーション
、コラボレーションする学
びの場となります。これらの
施設もみなさんの「創造的で
社会的な知性」を培うカリ
キュラムを支えるものです。
さらに言えば、本学のキャン
パスは、校舎や大学の敷地
だけにとどまりません。この
都留の地すべてがみなさんの
大学であり、学びの場です。

都留文科大学の学訓は「菁莪
育才(せいがかいくさい)」
です。これは中国の四書五
経の一つである『詩経』の
言葉によるものです。「せい
がか」は青々と茂るつよも
ぎ、「育才」はすぐれた人物
の育成を楽しむことを意味
し、「つよもぎが勢いよく成
長するように学生が成長し
て欲しい」との願いが込め
られています。

友人と、先生方と、地域の方
々と、コミュニケーション、
コラボレーションをはかりな
がら、新しい気づきを得て
ください。体系的な知識と
理論を学び、幅広い教養と
能力を身につけ、それを社
会で実践的に役立てる力を
育てて下さい。これからの
社会ではそれが求められて
います。そして、都留文
科大学はみなさんが勢いよ
く成長するための場です。

みなさんの本学での学びが、
豊かなものとなることを願
っています。



令和6年4月4日(木)、都の杜うぐいすホールにおいて、令和6年度都留文科大学入学式を開催いたしました。

式典は2部制で実施され、午前10時から行われた第一部では、学校教育学科・地域社会学科・国際教育学科・編入生(学校教育学科)、午後1時30分から行われた第二部では、国文学科・英文学科・比較文化学科・大学院・編入生(国文学科・英文学科・比較文化学科)を対象に行われました。

入学者の内訳は、文学部：国文学科148名、英文学科147名、教養学部：学校教育学科222名、地域社会学科179名、比較文化学科155名、国際教育学科47名、大学院文学研究科23名、学部編入10名であり、合わせて931名の入学が認証

されました。

新入生代表による挨拶では、地域社会学科の勝俣美姫さんが「専門分野を探究し、幅広い知識・教養を身につけるとともに、自ら考え、周囲の意見を尊重して判断し、積極的に行動する実践力を磨いていきたい」と、比較文化学科の佐藤陸翔さんが「日々、目まぐるしく変化する時代に、積極的に挑み、柔軟に対応できる行動力を身につけ、様々な経験を積みながら一層成長していきたい」とそれぞれの決意を述べました。

会場周辺では部活動・サークルなどの新入生歓迎活動も行われるなど、活気に満ちた雰囲気での開催となりました。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。



新入生のことば

教養学部 地域社会学科

新入生代表 勝俣美姫

いつになく足早に訪れた春の祝福を受けているような、この佳き日に、伝統ある都留文科大学の入学式を迎えられたことを、大変嬉しく思います。私たちがこの場にいられるのも、ご指導くださった母校の先生方、家族や友人たちなど、多くの方々の支えのおかげです。この四年間の大学生活を、実りある素晴らしいものにするために、日々精進したいと思います。

今年の1月1日に起こった能登半島地震では、数多くの方が被災され、今も避難生活を続けられている方が大勢います。私たちの同世代には、被災する中で、受験を迎えた人もあると思います。被災された皆様が、一日も早く元のような生活に戻られることを、心より願っております。

世界に目を転じると、ロシアによるウクライナ侵攻や、イスラエルとパレスチナの紛争も続いており、国際情勢は大きく揺らいでいます。その中で、学ぶ機会を奪われている若者も大勢います。こうした状況に想いを馳せる姿勢も大事だと感じています。このように不安定な世界情勢の影響は、気付かないうちに私たちの生活にも及んでいます。

また、私たちの生きていく社会は、高度情報化による新たなコミュニケーションツールの普及やリモート化、更

なるグローバル化が進んでいます。その一方で、少子高齢化や地域社会の人口減少、都市部への一極集中による地方の過疎化など、様々な課題が山積しています。

混沌とした状況の中で、社会は、目まぐるしく変化していきます。それに対して、私たちが学ぼうとする、教育や地域社会などの学問も、新たな考え方や方法を取り入れていく必要があります。その一方で、変わることのない部分も持っていると考えます。その両方向から、学びを深めていく姿勢を大切にしたいと思います。

これからの時代、私たちは多くの課題に立ち向かっていかなければなりません。そのために、大学で専門分野を探究するとともに、幅広い知識・教養を身につけたいと思います。同時に、全国各地から集まる学生の皆さんや、地域の方々との交流を通して、コミュニケーション力・人間力を高めたいと思います。そして、自ら考え、周囲の意見を尊重して判断し、積極的に行動する実践力を磨いていきたいと思います。

今、この場にいる新入生は、それぞれが、異なる夢や目標を持って、都留文科大学での学びに臨みます。大きな期待を胸に、この恵まれた環境のもとで、共に切磋琢磨していきたいと思います。そして、未来を見据えた高い志を抱いて、一日一日を大切に過ごしていくことを決意し、新入生のことばといたします。



新入生のことば

教養学部 比較文化学科

新入生代表 佐藤陸翔

やわらかな風に包まれ、春の訪れが感じられる、この佳き日に、伝統ある都留文科大学に入学できることを、大変嬉しく思います。私たちがこの日を迎えることができたのは、母校の先生方のご指導や家族、周囲の友人たちからの支えがあったおかげです。皆さんの思いに感謝しながら、これからの大学生活を有意義に送りたいと思います。

今年の1月1日、能登半島を中心とする大地震が発生し、お正月の穏やかな雰囲気を一変させました。家屋が倒壊したり、津波に流されたりする光景が、今も目に焼き付いています。多くの尊い命が失われ、避難生活を続けられている方も大勢います。被災された皆さんの話をニュースで聞くと、本当に胸が痛みます。このような自然災害が続く中で、私たちは、社会の一員として、被災された方々をどう支えていくのか、私たち自身もどう備えていくのか、考えなければなりません。

世界に目を向ければ、ロシアのウクライナ侵攻に続いて、パレスチナ・イスラエル戦争が起こりました。どちらも、未だ停戦の兆しは見えず、犠牲者が増加し続けるばかりです。ニュースで流れているガザ地区の現状は、日本では

想像もつかないことばかりです。改めて、戦争の恐ろしさを痛感しています。私たちは、これらの問題にも目を背けず、向き合っていくべきだと思います。

このように、日々、目まぐるしく変化する時代に、私たちは立ち向かっていかなければなりません。ICTの進歩によって、多くの障壁が取り払われ、私たちの生活も、常に世界の動きから影響を受けています。

一方で、コロナ禍以降、少子化は更に加速し、高齢化率も高まっています。地域社会の人口減少も著しく、私たちが直面する課題は数えきれません。このような急激な変化に対して、積極的に挑み、柔軟に対応できる行動力を身につけていくことが、求められているのだと感じています。

都留文科大学には、全国各地から学生が集まり、表情豊かな四季折々の自然の中、経験豊かな先生方のもとで学ぶことのできる、恵まれた環境があります。その中で、専門分野の高度な知識を身につけ、教養を深めていきたいです。同時に、サークル活動やフィールドワークを通して、様々な経験を積むとともに、互いに切磋琢磨しながら、人間的にも一層成長していきたいです。

そして、それぞれが夢を実現し、社会に貢献できるよう、一日一日を大切に、精進することを決意し、新入生のことばといたします。

1号館の改修について —新たな学びの場の充実へ—

副学長（学生・教育担当） 佐藤 明浩



本学は、来年、2025年に創立70周年を迎えます。現在、公立大学は全国で101校を数えるようになりましたが、その中であって、歴史を重ね実績を積み上げてきたいわば老舗のひとつとなっています。それだけに、施設の一部に老朽化がみられ、整備が必要となっているのはやむをえないことです。なかでも最も古い校舎である1号館で授業が始まったのが1965年。ただし当時は現在の1号館の西半分だけの建物で、正面玄関を含む東側が完成したのは翌1966年8月のことでした。以来、60年近くにわたって、学びの場の中心的存在として、用いられてきましたが、好適な学習環境を保持し、さらにアップデート、充実させるために、1号館の全面改修工事を計画しています。

皆様もご存じのように、新たな学び、研究、地域交流の場として、2023年4月にTHMC（6号館）の供用が開始されました。また、次ページの北垣先生の記事にありますように、「都留フィールド・ミュージアム（仮称）」が現在建設中で、2025年度に新たな施設として用いられる予定です。こうした大学施設整備計画の一環として、1号館の改修工事も行われます。

大学の施設整備委員会のもとに置かれた1号館改修計画検討部会では、現在、設計を担う建築事務所の方々とともに、各学科等の意見、要望を聴き取りながら、基本設計を固めているところです。着工は2025年度前学期の予定で、全面改修のため、2年半ほどの工期が見込まれています。工事中はこれまでのように1号館の教室で授業を行うことができませんので、上述の2つの新棟を含む大学施設をフルに活用し、一部仮設の教室で補うなどして、授業をはじめとする教育活動、また、部活、サークル活動などに支障が生じないよう、備えていきます。規模が大きく、期間の長い工事となりますので、学生の皆様、教職員の皆様には、ご不便、ご面倒をおかけすることがあるかもしれませんが、新たな学びの場を整備、充実させ、大学の発展を支える事業ですので、どうか、ご理解、ご協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。



■完成当時（昭和41年）



■現在

新施設「都留フィールド・ミュージアム（仮称）」着工—地域とつながる学びと交流の場がオープンします—

学長補佐 北垣 憲仁



地域とつながる学びと交流の場として、本学の新施設「都留フィールド・ミュージアム（仮称）」の建設が始まりました。

「地域の大学」を掲げる本学では、開学以来、教員や学生、市民の交流による魅力ある活動や事業が展開されてきました。小規模なまちに自然と人が混在する都留を博物館（ミュージアム）に見立て、自然や人の暮らしからじかに生きた学び—知識・技能を生きる中で活かすことのできる学び—を経験しようとする「都留フィールド・ミュージアム」の構想もその一つです。地域で長い時間をかけて築いてきた豊かな人間関係とフィールドを活かした本学のさまざまな取組は、大学認証評価等で高い評価を受けてきました。新施設は、本学が地域で蓄積してきた多様な交流や実践、理念を大切に受け継ぎ発展させていこうとするものです。

本学がこれから目指していく新しい教育と交流の場として新棟の環境を整えるために、今回の建物の実施設計は、高知県の牧野富太郎記念館や福井県の年縞博物館、長野県の安曇野ちひろ美術館などを手がけた内藤廣建築設計事務所が担当しました。建物の周りにはウッドデッキを配置し、明るい半外部の「まちの縁側」が計画されています。また建物を囲む緑化も、生きものの賑わいや人との交流を通した学びの場となるような植栽計画のもと、本学が推進するキャンパスの生物多様性に貢献するビオトープを造る予定です。この建物は音楽棟の西側の「つる湧水のほとり整備プロジェクト」事業地に建設されますが、周辺環境と調和するよう景観にも配慮した設計になっています。

1階には、少人数の演習や授業、映画の上映会、市民公開講座や子ども公開講座などに使用できる多目的スペース、キッチンを備えた多世代交流スペース、野外へ誘う図鑑や絵本類を中心に配架する予定の図書スペース、教育資料としての活用を目指すアーカイブス、地域交流研究センターの機能を入れた空間などが計画されています。

2階には、調理・被服実験室などが配置され、家庭科に関連した授業や実習への使用も予定されています。衣・食・住は、私たちの暮らしの根幹をなすもので、「都留フィールド・ミュージアム」が大切にしてきたテーマです。新棟でのこうした諸実践は、世代や文化を超えた新しい学びのあり方を問い直す契機となることでしょう。

地域とつながる多様な学びの場を目指す新棟は、本学が創立70周年を迎える2025年に完成の予定です。



■外観パース：北側道路より見る



■鳥瞰パース

副学長就任



都留文科大学の 素晴らしさを伝える

副学長（研究・学術担当）

春日 由香

令和6年4月1日付で、田中昌弥副学長の後任として副学長（研究・学術担当）・理事に就任いたしました春日由香でございます。どうぞ、よろしくお願い致します。

副学長・理事という職は大学人としての豊富な経験が不可欠であるにもかかわらず、大学教員としての経験がようやく10年目となる自分は、その資格要件を満たせていないのではないかと考え、お引き受けするべきかどうかを随分と悩みました。

一方、都留文科大学は令和6年度より、文学部2学科教養学部4学科へと学部学科改編を行い、新カリキュラムをスタートしました。併せて「Tsuru 副専攻プログラム」も始まりました。この「Tsuru 副専攻プログラム」は、学部・学科を超えて興味・関心のある分野を学ぶことを主な目的としています。学生は、所定の科目を履修することにより各副専攻プログラム「修了証明書」を取得できます。こうした学生自らがプログラムを「選ぶ」、学びを「実践する」、文理融合の幅広い学びを卒業後の人生に「活かす」という姿勢を、都留文科大学は大切にしています。私自身もまた、本学のこうした学びの特色を広く、学内・学外に向けて発信していきたいと願うようになりました。そして微力ながら副学長・理事として、都留文科大学のために自分ができることがあるかもしれないと考えるに至りました。

本学は令和7年度、創立70周年を迎えます。多くの卒業生にお会いする機会に恵まれるようになり、全国で活躍される都留文科大学の卒業生の「人間力」「真の学力」「社会人力」に触れて、感銘を受けました。こうした卒業生の「地域社会への貢献」が、本学の評判と信頼度を高め、目に見えない大学評価を引き上げたと確信しております。

加えて、私は日頃より、都留文科大学の学生は「わが国で最も素晴らしい学生である」と述べています。その素晴らしさは、学生個々の資質（素直さ・向日性・継続性・協調性など）と、全国から集まる彼らを受容し育ててくださる「都留市」という地域の懐の深さ、本学職員・教員（専任・特任・非常勤教員全員）のひたむきな努力と責任感、という三つによって支えられているのではないのでしょうか。こうした都留文科大学の魅力やよさを、私も研究・学術担当副学長として大学認証評価の際に申し述べる、或いは70周年記念行事の機会を活用して発信するなどに努め、懸命に励んでまいりたいと存じます。ご指導・ご助力をお願い申し上げます。



新教員紹介

文大に着任するにあたって



ツノヨモギとともに

国文学科 講師
陳 佑貞

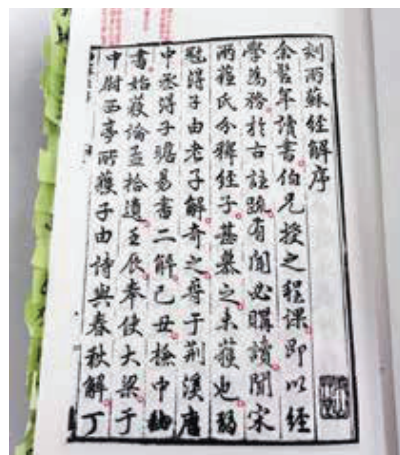
漢文学担当新任教員の陳佑貞と申します。三月まで三年間、帝京大学史学科に勤めましたが、このたびご縁があり本学へ移籍いたしました。

専門は儒家經典の解釈史で、特に中国宋代における注釈学に関心をもっております。三月に上梓した『三蘇蜀学の研究』では北宋時代の蘇軾らがそれまでの經典解釈をどう変容させたのかを、当時の士大夫中心の国家構造とのつながりに着目して分析しました。今後はそれより後の時代の学術史に、また、儒学の日本文化とのかかわりに研究の幅を広げようと考えています。国文学科をはじめとする教員や学生の皆様から研究上の刺激を受けることを楽しみにしております。

文大に着任してまず、研究室の蔵書の充実ぶり、そして学生諸氏の堅実な学習態度に感銘を受けました。諸橋初代学長以来の伝統をもつ本学漢文学を担当す

る喜びとともに、この良き学風を守り伝えねばならないという責任を感じています。

本学の学訓の出典である「菁菁者莪」の詩では、学生に喩えられるツノヨモギたちは教育者たる「君子」に出会い、「樂」しみ「喜」ぶ、と歌われます。文大の教員として、若いツノヨモギたちを「助長」するのではなく、主体的に漢文の面白さに触れて楽しみ喜びながら漢文との一生のつながりを作るお手伝いをする「君子」となれるよう努めてまいります。



蘇軾ら三蘇の經典注釈書・兩蘇經解。儒学の教養により朝政に参与する士大夫としての問題意識に基づく独自の解釈が多く含まれ、のちの朱子学にも大きな影響を与えた。



着任のご挨拶

国文学科 特任講師
藤島 綾

文学部国文学科に着任しました藤島綾です。専門は古典文学です。平安時代の仮名文学、とりわけ『伊勢物語』が現代まで受け継がれてきた歴史に関心があり、その実態について、文献資料を調査しながら研究しています。

都留文科大学では、これまで約10年間、非常勤講師として講義を担当してきました。その間、新入生のみなさんが、大学の専門的な学びに向けて、高校時代に身につけた知識をさらに広げたり、深めたりしていく姿を間近で見てきました。また、やりとりをつうじて、私自身も考えを深めたり、学んだりできたことも、貴重な経験でした。

文学のおかれた環境はつねに変化しています。読書

という行為ひとつをとってみても、最近では電子書籍や朗読アプリなどが普及し、ツールが多様化しています。そのようなたえない変化の一方で、千年以上にわたって人々が受け継いできた古典文学には、いったいどのような魅力があるのでしょうか。近年では古典文学を学ぶ意義を問われる機会が増えています。さまざまな意見はありますが、いずれにせよ長期的な視点を取り入れた丁寧な思考が必要ではないかと思います。大学という学びの場でみなさんと一緒に考えていければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。



はじめて買った『伊勢物語』の絵入り版本。
明治以降に印刷されたものです。



着任のごあいさつ

英文学科 准教授
小室 龍之介

非常勤講師時代と特任准教授としての勤務を経て、この度、都留文科大学文学部英文学科准教授に着任いたします小室龍之介と申します。この度の着任をとても光栄に存じます。

特任准教授として着任した際の挨拶文の中で、ごく一部のための「はしご」のような奨学金制度の必要性よりも、「みんなの高速道路」により高等教育をより広くゆき渡らせられる社会制度の必要性を訴えたイギリスの批評家・作家レイモンド・ウィリアムズの議論について触れましたが、この議論の意義を改めて噛みしめています。

研究分野は20世紀イギリス文学および文化ではありますが、その中には、文学研究とはいえ音楽研究が

含まれていたり、イギリス文学とはいえアイルランドやインドといった地域にもまたぐ研究が含まれていたりします。領域横断するのが好きなのです。

本学でイギリス小説やポピュラー・カルチャーの講座を担当して数年、フェミニズムやジェンダー、人種や階級といったテーマを盛り込むことで、より良い生き方、より良い社会について考えるきっかけ作りを、イギリス文学および文化の授業を通して行えるよう心がけています。不肖ながら鋭意努力して参りますので、ご指導・ご鞭撻のほど、引き続きよろしくお願い申し上げます。



ルーマニアのスペクトラル楽派の作曲家、イアン・ドゥミトレスクとのコンサート後のひととき（2014年、アテネにて）



着任に寄せて

地域社会学科 教授
石垣 千秋

このたび、地域社会学科に公共政策論の担当教員として着任した石垣千秋です。着任前の7年間は山梨県立大学に勤務しており、偶然にも同じ山梨県の公立大学で新しい仕事を始めることになりました。

私は医療政策に関心を持っています。進歩が著しい医療技術の恩恵を私たちが受けていることに疑う余地はありません。その恩恵を国民が受けられるようにし、国民の生命と健康を守るのが各国の医療保障制度です。制度の下で多くのアクターが複雑な利害関係を有しています。それらを分析し、時には国ごとに異なる制度の比較を行い、さらにはよりよい医療のあり方を探っていくことが研究の目標です。

医療政策との出会いは社会人になって5年目、休職

して留学したイギリスの大学院でした。修士論文のテーマを検討する中で、当時の指導教員に勧められたのがきっかけでした。帰国後、「医療を動かす」をテーマとして集まった社会人向け講座で多くの人と出会い、それを研究する道を選びました。研究テーマも研究者としての自分の今も、人との出会いによってたどり着いたのです。

学生さんにも不確実性が高い時代を生き抜く確かな力をつけ、思いがけない出会いから人生を切り開いていってほしいと思っています。



修士課程の時に過ごしたイギリスのバースの町。古代ローマ人が造った公衆浴場の上にイギリスの貴族が保養施設を建て、今では観光地となっています。



着任のご挨拶

地域社会学科 准教授
田開 寛太郎

4月に教養学部地域社会学科に着任いたしました田開寛太郎です。出身は富山県富山市で、前年度まで長野県松本市に6年間住んでいました。現在は都留市で生活をはじめ、自然や歴史文化にあふれたこの土地で働けることを大変うれしく思います。

私の専門は環境教育で、最近は湿地教育やVRをキーワードに研究に取り組んでいます。先日、私が所属する日本環境教育学会中部支部の研究大会が福井県池田町で開催され、さっそく北陸新幹線を利用して参加しました。池田町は人口約2,600人と小規模な自治体ですが、食Uターン（生ごみ回収）による循環型農業や地元合同会社による小水力発電の実現など、着実な環境配慮や創造の取組みが進んでいます。印

象的だったのは、地域で新しい価値を生み出し、そこで働く人々、そして地域の楽しみを見出す活動に参加する人々の姿でした。

環境教育はたんに環境問題解決の手段としてリサイクルや節電を教えることだけではありません。池田町のように、日常生活の中で楽しみながら、環境を優先する新たな価値観を広げる場をデザインするといった大切な役割も担っています。そうした豊かな環境・地域づくりに貢献する大学を目指し、教職員や地域の皆さん、そして学生と共に、私のできることから少しずつ進めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



食Uターン堆肥「土魂壤（どこんじょう）」の製作過程を視察



他／多文化と普遍的な 問いのあいだで

比較文化学科 准教授
関 東 暉

2024年4月に教養学部比較文化学科に着任しました、関東暉と申します。歴史学をベースに文学や哲学、社会学などの知見を取り入れながら、韓国・朝鮮地域を中心とした近現代東アジアの思想史研究をしています。これまで、近代的な知が東アジアの独自の歴史的文脈において屈折しながらどのように受容されていったのか、またその過程で、帝国主義／植民地主義とどのように接続されていたのかについて考察してきました。最近では、東アジアにおけるポストコロニアル状況、とりわけ植民地支配をめぐる社会的記憶や文化的表象、また在日外国人をめぐる諸問題についても関心を持っています。

本学では、「正義論」（2025年度より「アジア思想」）や「地域研究」、「アジア文化・社会論」などの講義、

演習を担当します。学生のみなさんには、他／多文化を通して「自己」を相対化し捉えなおすとともに、私たちの生きる「世界」を凝視し、よりよい人類社会のために、つねに「普遍的な問い」を携えて学んでほしいと思っています。異文化を体現する身近な「外国人」教員として、私も都留でみなさんと一緒に教育・研究に努めたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。



京都帝国大学哲学科出身の言語学者・哲学者、崔鉉培の記念館（韓国・蔚山、筆者撮影）



ジェンダーの視点から 世の中を見る

比較文化学科 准教授
横山 美和

2024年4月に比較文化学科に着任しました、横山美和と申します。ジェンダー論と科学史、科学技術社会論を専門とし、科学・技術とジェンダーの関係に焦点を当てて研究を行ってきました。科学や技術は客観的・中立的なものでジェンダーとは関係がないのではないかという疑問や、人々の生活を便利にする「良い」もの・営みであるという認識を持つ方も多いと思います。しかし、ジェンダーやフェミニズムの視点から見ると、科学や技術の研究者に女性が少ないのはなぜか、そしてそのことは社会にどのような影響を与えてきたのか、オートメーションやAIの発達が男女で異なった影響を与えるのか、リプロダクティブヘルス（性と生殖の健康）向上に資する技術への女性のアクセスが制限さ

れていないか、など、多くの研究すべき課題があります。それらには、他の分野のジェンダー問題と同様に性別分業や文化的・宗教的背景などが深く関わっていると考えられます。

着任後は「ジェンダー論」や「欧米社会・文化論」などを担当します。私たちが「当たり前」と思いがちな社会的・文化的な現象をジェンダー視点から分析することの重要性を、学生の皆さんと共有していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



日本とアメリカの古い産児調節関連の本 左「別冊政界ジープ」第1号（1949年）、右Leo J. Latz, *Rhythm* (1932)（筆者撮影・個人蔵）



着任のご挨拶

国際教育学科 准教授
畠山 勝太

国際教育学科に着任した畠山勝太です、どうぞよろしくお願いいたします。これまで世界銀行・ユニセフで10年勤務して大西洋を行き来しながら英語圏アフリカ・南アジアの教育支援に従事して、国際機関の職を辞してアメリカで博士号を取得した後は内閣府でPKO活動支援や紛争地での幼児教育支援の研究をしていました。また、現在もネパールで教育支援のNGOを運営しています。

私の専門は、国際比較教育学・教育政策になります。具体的には、主に低中所得国で公平・効果的・効率的(Equitable・Effective・Efficient、頭文字をとって3E)な教育政策を実現することで、貧困の無い平和で自由な社会を目指す研究を行っています。これまで論文で扱ったトピックは障害児・幼児・スラムに住む

子供達・児童労働に従事する子供達で、マージナライズされやすい子供達の教育へのアクセスや学びを、計量(因果推論)・定性手法を用いて研究しています。

私は岐阜で生まれ育ち、ジンバブエ・マラウイ・ネパールなどで仕事をしてきて、山梨県の大学に着任しました。これらの地域に共通するのは海が無いという点です。港が無く交易条件が悪いからこそ人的資本の蓄積が肝要なわけで、「人は城、人は石垣、人は堀」を具現化するような教育をしていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



NGOの仕事でネパールの女子大学院で講義をしている様子



なぜあなたは すでに〈哲学者〉 かもしれないのか

国際教育学科 講師
藤井 翔太

藤井翔太と申します。テンプル大学ジャパンキャンパスでの勤務を経て、今年度、本学国際教育学科に着任いたしました。

私の関心領域は、応用哲学や教育哲学です。哲学といえば、存在論、認識論、倫理学などの領域を含む、基本的な概念や規範を根本的に問い直し、吟味する営みだとされます。こうした抽象的な議論や探求は、日常生活との関わりが薄く、物好きや世捨て人のための知的なパズルにすぎない、と言われたりもします。しかし、哲学のことを専門的なトレーニングを受けた一部の人のための娯楽だと捉えるのは、実にもったいないだけでなく、哲学観としても狭量かつ不正確

だ、というのが私の考えです。社会的属性にかかわらず、日々の暮らしの中で生起する何気ない出来事について素朴な問いを抱き、それをごまかすことなく誠実に省察する人々は、すでに〈哲学者〉だと言えるのではないのでしょうか。そうした省察的な生き方をする誰しもにとって、伝統的な哲学者たちの議論は有用であるとともに、制度上の哲学者たちもまた、自分たちの知的営為のあり方について、〈哲学者〉の姿から学ぶ契機を得ることになるはずです。

教育とは、自律とは、幸福とは、自己とは——こうした問題を真摯に問う、都留文の〈哲学者〉たちの探求に寄り添い、サポートするのが楽しみです。



訳書『アメリカ哲学入門』刊行記念イベントの様子



「英語力を 底上げするために」

語学教育センター 准教授
島崎 治子

他の国の大学生に会ったことはありますか?どの国の大学生も皆、英語でお話ができますよね。‘I can’t speak English’ と言って逃げようとするのは、日本の大学生くらいではないかと思います。都留文大の学生は、そんなことはないと思いますし、誰一人として、そうならないでほしいと思います。自分の思うことを英語で発信し、他の国の人々と意見や情報を交換することにより、相互に高め合って行ってほしいのです。

それでは、日本人の英語力が他国の人に比較して不足している原因は何だと思いませんか?

「英語の本を読む経験が圧倒的に不足しているから」と Haruko 先生は思っています。皆様は今までに英語の本を何十冊、何百冊、読んだことがありますか?

専門書ではなく、絵本や児童書を読む経験を積むことの方が大切です。絵本や児童書を通して、私たちは、単語や表現を知り、言葉の持つリズムに親しみ、想像力を働かせます。物語に限らず、図鑑、コミックなど、どんなジャンルの本でも良いので、英語で 100 冊ほど読んでみましょう。

Haruko 先生の研究室や CLE 語学教育センター (3 号館 3 階) には、英語楽読 -English Pleasure Reading- にぴったりな書籍が数多くあります。まずは金曜日 14:00-16:00 に CLE で開催される Haruko 先生の Office Hours に来てください。英語の本を楽しく読みましょう。そして英語力を底上げしましょう。



Boo-tiful memories with my students



着任のごあいさつ

語学教育センター 特任准教授
神山 英子

本年度、語学教育センターに着任しました神山英子です。緑が美しい大学で教育や研究に従事できることをありがたく思っているところです。

私はこれまで、日本語学校や小・中学校、高等学校、大学等、海外 (主に中国) や国内の教育機関で日本語学習者と日本語について学んできました。また、日本語教師養成にも携わっています。

研究では、医療場面での異文化コミュニケーションに関わっています。特に、介護現場での外国人スタッフと日本人スタッフとのミス・コミュニケーションに興味・関心があります。外国人介護人材は、母国で日本語と日本式介護の考え方や技術等をしっかり学んでから、来日し、日本の介護現場で働いています。が、介護現

場ではうまくいかないことが多いのです。そこで、「どうすればミス・コミュニケーションがなくなるか」ということを考えています。解決策の1つとして、「介護現場でのやさしい日本語」があるとも思っていて、研修などを通して、相手の立場を尊重したコミュニケーションツールである「やさしい日本語」の考え方を主に日本の方に広める活動をしています。学生の皆さんともこのテーマについて考えてみたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



介護現場における「やさしい日本語」セミナーの様子



着任のご挨拶

教職支援センター 特任准教授
大石 太

教職支援センターに着任しました大石太です。どうぞよろしくお願いいたします。

私は山梨県の小学校教員として勤務し、後半は管理職として都留市にもお世話になりました。当然 SAT 活動やムササビ観察等都留文科大学の学生さんたちと関わらせていただき、笑顔で子どもたちと接する喜びを共有させていただきました。

これまで私は小学校全学年を担任し、退職後の再任用では特別支援学級担任も経験させていただきました。また、ロンドン日本人学校では、文科省海外子女教育研究協力校としてクロスカリキュラムの研究・実践に取り組みました。これまでの教員生活を振り返ると、やはりやりがいのある仕事だなと感じています。

本学には、教育フィールド研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳのような特色ある実践的なカリキュラムが用意されています。きっと教育実習などと合わせ、教師という仕事の素晴らしさに出会えることでしょう。

しかしながら、実際に学ぶ中で不安や悩みを抱くこともあるでしょう。私のこれまでの教職経験を踏まえ、真摯に向き合っていきたいと思います。教職を目指そうとする学生のみなさん。私たち教職支援センター職員は、新棟 THMC 4階にいますので、何でも気軽に相談しに来て下さい。



ロンドン日本人学校時代(モルシャム校との交流学习)



学校って？

教職支援センター 特任教授
藤田 康郎

教職支援センターで働くことになりました藤田康郎です。私はこれまで世田谷の私立小学校に勤めていました。この学校では町田市に田んぼを借りて5年の子どもと米作りをしたり、1年生とアイヌ古式舞踊や刺繍を楽しんだり、6年生と料理や踊りや歴史などを通して沖縄を学んだり、と五感をフルに生かした学習を楽しんできました。2020年度のコロナウイルス感染拡大期には、やむなく臨時休校で、授業の代わりとして社会や国語の教材を動画で作成し、YouTubeにアップするなど慣れないことをしました。30本もの動画を作成し「まるでユーチューバーだ」と言われることもありましたが、肝心の子どもたちはほとんど見てくれませんでした。6月末に学校が再開すると子どもたちは友達

同士抱き合って喜んでいました。算数では米軍の砲弾の破片を触って「こんなに重いんだ」「サビのにおいがすごい」と子どもは語ります。時期をずらして取り組んだ運動会では競技の練習を積み重ねながらケンカが起き、競技で負けるとみんなで泣きました。「学校は楽しいな、友達もいるし」という子どもの率直な感想がとても大切なことを語っていると思います。学校って何だろう、教育って何だろう、という問いを持ち続けていきたいです。



「祖国復帰闘争碑」(沖縄本島 辺戸岬)
この石碑を見て歴史を学び直しました

ボストン、ニューヨーク、 テキサスでの在外研究を終えて



英文学科 教授 加藤 めぐみ

都留文に着任してから10年目となる2023年度の一年間、研究に専念できる本当に幸せな時間をいただきました。大学、学科の先生方のご理解、ご協力には心から感謝しております。このサバティカルで私はかねてからの三つの夢を実現することが出来ました。

ひとつは自分で企画をした論集の出版です。幸いにも豪華な執筆陣に恵まれ、神戸大の中村麻美先生には共編著者としてお力添えいただき、年末、水声社から『マーガレット・アトウッド『侍女の物語』を読む——フェミニスト・ディストピアを越えて』を上梓することが出来ました。『侍女の物語』の舞台であり、アトウッド自身も学んだハーバード大学で行われた世界文学研究所の夏期セミナーに参加し、教授陣、若手研究者たちと過ごした時間、ワイドナー図書館でのリサーチは、本書の仕上げに不可欠なものとなりました。もうひとつは英国での拙論の出版です。日本生まれの英国人作家カズオ・イシグロについての論集、Japanese Perspectives on Kazuo Ishiguroに執筆する機会を得て、今年に入って英国 Palgrave Macmillan から出版されました。テキサス大学オースティン校ハリー・ランサム・センターにあるイシグロのアーカイブで発掘したTVドキュメンタリー映画の企画書「ゴースト・プロジェクト」の内容を紹介するとともに、映画制作が実現に至らな

かった背景を探りました。三つ目は海外での研究生生活です。私は英文学を研究しながらも、ライフ・ワークバランスを取るなかで、留学のチャンスを逸してまいりました。それがこの度、ニューヨーク市立大学クィーンズ・カレッジに客員研究員として在籍し、教員や学生と交流しながら、大学図書館やNY公立図書館だけでなく、イエール大学での講演会やコロンビア、テキサス大学でのリサーチ、ワシントンD.C.のスミソニアン博物館国立アジア美術館の資料室にも足を運ぶことが出来、充実した「夢」のニューヨークでの研究生生活が実現いたしました。

そして迎えた新学期、クィーンズ・カレッジの日本文学研究者ジョシュア・ロジャース教授の日本文学の授業と私の英文学のゼミとをオンラインで繋ぎ、映画を通して「戦争」について多角的に学ぶCOIL (Collaborative Online International Learning) という授業を実践しました。日米の55名が、オンラインで一緒に授業を受け、映画の感想をグループLINEに投稿、8つのグループに分かれ、共同して二つの戦争映画についてのプレゼンを作り上げる——新たな挑戦に皆が嬉々として取り組んでくれたことを大変嬉しく思っています。サバティカルで広がった私のネットワークを、今後、学生たちがさらに広げていってくれたらと願っています。



カズオ・イシグロのアーカイブのあるテキサス大学
ハリー・ランサム・センター



ハーバード大学世界文学セミナーにて

産地研究の再考へ向けて



地域社会学科 教授 両角 政彦

昨年度1年間、東京大学空間情報科学研究センターに受け入れをいただき、小口高先生のもとで「グローバル経済下における農産物需給変動リスクと産地レジリエンスに関する研究」を進めてきました。この背景には、地理学で蓄積されてきた伝統的な産地研究を再考したいとの思いがありました。

特定の農産物産地で数十の経営体に綿密なヒアリングをして実態を把握し、問題や課題を浮き彫りにして対応策を検討するフィールドワークにもとづく研究手法は、ときに「方法論なき実証研究」とも言われ、業績主義の下で非効率化もし、個人情報保護による受入態勢の変化で難しくなってきました。産業構造の転換や農産物貿易の拡大と農業の企業経営化などによって、産地自体も変容し、脱産地化の進行にともなって研究も少なくなってきました。

その一方で、地方の農山村や離島などの一般に営農条件の不利な地域では再産地化や再組織化などの対応をとっており、個と集団をめぐる新たな産地主体の形成と農業農村の社会経済的意義の側面に注目して、研究を再考する必要があるのではないかと考えてきました。

20年以上研究を継続してきた新潟県魚沼市では、産地組織や経営者と再会し、厳しい市場競争の下で主体的に革新的な産地対応を柔軟に生み出し続ける組織の再編と産地間のネットワークの構築状況を詳しく知ることができ、新たな産地研究につながる予感がしました。

この比較研究として、数年前から調査を始めてい

た鹿児島県沖永良部島では全体で1ヵ月ほど滞在し、離島の社会経済に関わる気象災害等のリスクと農業の島のレジリエンスについて、50あまりの機関や経営体にヒアリングに協力をいただき、主体的な産地対応と島民生活の情報を集めました。

この調査では、イギリスの地理学者であるマッシュューズとハーバートが提唱する「空間」「場所」「環境」の中心概念と立地の理論を援用しながら、これまでの研究の中で各々重点を置いてとらえてきた資本、知財、組織、土地、リスクなどの各事象について、「地域」や「景観」のフレームワークで統合的にとらえる機会になるかもしれないと考え、その手がかりになりました。

このほかに、農村・都市の空間構造の側面から、長崎県五島列島では離島の地場産業の存立を、南信州では中山間地域の生活基盤の形成を、大阪、名古屋、川崎では大都市郊外の開発過程などを調査したり、以前の調査地も訪れたりしました。これらの調査結果の一部を論文等にまとめ、学会で報告しました。今後も順次発表しつつ、海外での調査も組み込んでいくことになります。

研究期間中に多大なご配慮をいただきました東京大学の小口高先生、本学教職員、学科教員、代講教員、学生・ゼミ生の皆様方に、心より御礼を申し上げます。この経験を活かし、校務、教育、研究に励んで参ります。今後どうぞよろしくお願いいたします。



沖永良部島の社会経済を百年以上にわたり支えてきたユリ産業



沖永良部島の田皆岬でユリの自生種の生態と知的財産化の調査

ジェンダーと開発論×南アジア研究を 求めて北欧へ

比較文化学科 教授 佐藤 裕



はじめに、在外研究の機会を与えてくださった本学、煩雑な諸手続きを支えてくださった事務局の皆様、1年にわたる渡航を後押ししてくださった比較文化学科の同僚に御礼申し上げます。

在外期間中にはスウェーデン南部にあるルンド大学の社会科学部ジェンダー学科に客員教授として受け入れていただきました。同大学は私がインドに留学していた2004年に国際会議参加のために訪れたことがあるものの、知人はゼロでした。まったく面識がなく、英語での研究成果も少ない私を快く受け入れてくださった同学科には感謝の念に耐えません。

ルンド市は小規模ながらも、世界中から学生や研究者が集まる学園都市です。そのため、大学では研究会はもちろんのこと、諸会議なども英語で行われることが多いです。私は客員としての身分にもかかわらず、月例の学科会議や、学科の宿泊研修などに参加させていただきました。さらに、在籍・施設利用料 (bench fee) なしで研究室が貸与され、図書館の豊富な電子資料へのアクセスも享受しました。

ジェンダー学科では社会人類学者のヘレ・ライドストロム教授が受入研究者を務めてくださり、公私ともにお世話になりました。同学科ではフェミニズムのみならず、私が関心を抱きつつも不勉強であったLGBTQ+にかかわる研究について、昼食やコーヒータム (fika) 時の会話、研究会での議論などを通して同僚たちから多くを学びました。また、私も2度報告した学科の内部セミナーや (写真1)、第一線で活躍する研究者を招いた学科主催の定例研究会では、女性や性的マイノリティをとりまく権力、既存のジェンダー秩序に抗う人々の集合行為と主体性といったテーマについての理解を深めることができました。

ルンド大学には北欧最大の南アジア研究の拠点である、スウェーデン南アジア研究ネットワーク (SASNET) があります。SASNET では北欧はもとより南アジア出身の研究者との交流を図るとともに、年次シンポジウムでも報告する機会に恵まれました (写真2)。

さらにライドストロム教授には社会科学部の批判的危機研究会にも加えていただき、不平等と社会的レジリエンスを軸に福祉国家、移民、紛争、開発をテーマとする研究者らと交流を深めました。

在外研究期間中には日本語での原稿を2本、リレーエッセイを3本執筆するとともに、2本の英語論文の草稿を執筆しました。英語論文については修正を施したうえで、国際誌に投稿する運びとなります。いずれも、計画書作成の段階に留まっている英文での書籍出版につなげるのが当面の目標です。

スウェーデンでは春から初秋にかけて爽やかな季節を満喫し、日の短い12月には現地調査のため、科研費を用いてインドに戻りました。このように、在外研究期間中に私が意識したことは、研究のモードと健康な生活を取り戻すことでした。当初、高らかに打ち立てた研究目標は未達成ですが、ここ都留でも焦らずに研究課題を遂行していこうと思います。



写真1：ジェンダー学科の内部セミナーでの報告。投稿論文等の原稿を事前に共有し、報告の際に参加者全員からフィードバックが得られるしくみになっている。



写真2：スウェーデン南アジア研究ネットワークの年次シンポジウムにて。

「日本文化とコミュニケーション」



国際教育学科 教授 茂木 秀昭

はじめに、学外研究の機会を与えてくださったことに、都留文科大学並びに国際教育学科の先生方、関係する皆様に御礼申し上げます。

昨年度1年間、東京外国語大学に内地研究員として受け入れていただきました。

以前、外大では、留学生対象に講演をしたり、大学院の紛争解決講座で留学生に英語ディベートの指導をしたことがあります。今回は、『国際コミュニケーション』に関する共著がある大学院国際日本学研究院の先生と日本語や日本文化とコミュニケーションに関する共同研究をおこなったり、図書館等を利用して、調査や著作などをおこないました。

研究活動としては、コミュニケーション学を中心に、異文化コミュニケーションの研究以外に、説得コミュニケーション（議論学）やコミュニケーション教育、メディアコミュニケーションに関する執筆や講演、取材協力などをおこないました。

4月には「踏み込むコミュニケーションー議論の姿勢を学ぶ」として、建設的な議論における批判的思考力及び客観的論理展開能力の必要性に関する論考を執筆し発表しました。

5月には、探究型教育が新学習指導要領でも導入される中、その一方法としてのディベートの効用に関して、全国都市立高校校長会の研修で100人以上の校長を対象に「課題探究の手法としてのディベート」という講演をおこないました。



前身は1857年に江戸幕府が設立した蕃書調所という東京外国語大学

著作活動としては、『問題解決』に関する本の監修と一部執筆を行い5月に出版され、10月には韓国で韓国語に翻訳・出版されました。

また、『調査方法』に関する書籍の監修と一部執筆を行い、7月に出版され、その中で触れたネットのコミュニケーション上の問題点に関してのインタビュー記事が11月に群馬の上毛新聞に掲載されました。同じ11月には2021年に監修し出版された『ロジカル思考』の書籍が簡体字中国語版として、中国で翻訳出版されました。

異文化コミュニケーションに関する研究としては、特に日本人のコミュニケーションの特徴に関して、古代からの歴史や様々な事象の中で、コミュニケーションがどのようにおこなわれて、どのような意味や影響を持ってきたのか等について考察し、古代出雲王国の伝承などの文献をリサーチし、現地調査も数カ所でおこない、日本文化や宗教、日本人の行動原理とそれらの成り立ちに関する論考をまとめました。日本語のタミル語接触語源説についても、共同研究者と情報交換しながら、文献調査等を行っています。今回の経験を、これからの教育の中で還元していきたいと思います。



ドラヴィダ諸語（タミル語もその1つ）等語学文献豊富な外大図書館

昨年度（令和 5 年）の就職状況を振り返る



キャリア支援センター長
山本 芳美

堅調な就職状況・さらに 0.9 ポイントの伸び

都留文科大学の就職状況についてお伝えします。令和 6 年 3 月に本学の学部を卒業した 819 名の就職率（就職者 / 就職希望者）は 98.3%で、97.4%であった前年度よりも 0.9 ポイントの上昇です。Covid-19 の影響から反転するように若者層の求人数が上昇しているとの報道にみるように、大学生をめぐる就職状況は非常に好調です。昨年度は一昨年度より 1.3 ポイント

の伸びを示し、今年度も微増とはいえ引き続き上昇したのは喜ばしい限りです。

なお、「就職しない」と答えた卒業生のほぼ半数の 58 名は、大学院や留学などで学び続ける道を選びました。また、教員や公務員採用試験合格を目指す卒業生も 11 名おり、文大生ならではの粘り強さをみせています。

公務員採用と一般企業の就職にも大きな伸び

教員・公務員・一般企業の業種ごとにみますと、教員採用は 181 名となりました。うち小学校教員は 108 名の採用です。中学校教員が 22 名、高校教員が 11 名、中高共通校には 8 名が採用されました。全国 42 都道府県の教育委員会に採用されています。私立学校へも 23 名が採用されて教鞭をとることになりました。

昨年度 124 名採用の公務員は 141 名の採用を達成し、大きな飛躍を見せました。うち国家公務員が 39 名となります。また、一般企業への就職も 353 名から 367 名へと伸びています。

表 1 令和 5 年度の就職関係データ

	5 年度
卒業者数 A	819
就職希望者数 B	701
就職決定者数 C	689
大学院等進学者数 D	51
就職率 $C/B \times 100$	98.3
進路決定率 $(C + D) / A \times 100$	90.4

就職決定者内訳

企業	367
教員	181
公務員	141

今後の展望

教員養成の分野で全国クラスの実績を持つ本学ですが、公務員採用と一般企業への就職がほぼ半数を占めている現状があります。企業就職をした卒業生が、数年後にステップアップを目指して転職する傾向も見られます。

こうした状況を踏まえて、本学キャリア支援センターでは、教員、公務員、企業の各分野の相談員を配置し、3、4 年生の相談にきめ細かくあたるようにしています。今後は、1、2 年生のキャリア教育にも、より一層力を入れていく方針を立てています。山梨県東部に位置

する地方大学ならではのゆったりした環境は、本学の魅力のひとつです。しかし、自らが何を求め、どのような環境でいかなる働き方をしたいのか、学生たちにできるだけ早期に自らのキャリアの方向を見定め、大学内外で学びを進めていく意識づけをしていく必要が高まっています。

すでに、企業家、政治家、起業家、NGO 職員など、さまざまなキャリアをもつ「人生の先達」の聲に接する授業「キャリア形成」が数年前より開講されております。1日8時間、5日間の40時間以上の実習、実習先からの評定書、事前事後指導等を総合して単位認定する「インターンシップ」の単位認定もあります。私が文大に着任した21年前よりも、学生たちは自らが積極的にインターンシップの機会を探し、行政の現場や企業風土により気軽に触れるようになっていきます。

富士山と富士五湖を擁する山梨県南部は国内有数の観光地でもあり、Covid-19後に再び急増したインバウンドの人々にさまざまな対応できる人材を求めています。全国各地から学びにきた本学学生たちにも、「ぜひ、そのまま都留市周辺に残って就職し、活躍してほしい」との要望と希望が高まっています。

キャリア支援センターは、こうした大学隣接地域に開かれた可能性も見据えつつ、学生自身が今後いかに生きていくのか、その方向性を定めていくことを応援しています。講義やワークショップ、OB・OGとの面談などの各種催しを年間通じて実施していますので、学生の皆さんにぜひ早めに活用してもらいたいと考えています。

表2 令和6年3月卒業者（前期卒を含む）の就職先別人数

A 教員	小学校	108	D 公立学校都道府県市別採用数（臨採含む）	青森県	1	山梨県	29
	中学校	24		岩手県	4	長野県	9
	高等学校	19		宮城県	4	岐阜県	5
	特別支援学校	7		山形県	3	静岡県	7
	私立学校	23		福島県	3	静岡市	1
	教員合計	181		茨城県	2	浜松市	3
B 公務員	国家公務員	39		栃木県	1	愛知県	2
	地方公務員	102		群馬県	2	三重県	6
	公務員合計	141		埼玉県	3	滋賀県	1
C 民間企業	農業・鉱業	1		さいたま市	2	京都府	1
	建設業	12		千葉県	1	大阪市	1
	製造業	30		東京都	18	兵庫県	1
	電気・ガス熱供給業	7		神奈川県	1	和歌山県	2
	運輸・郵便業	15		横浜市	6	岡山市	2
	卸小売業	58		川崎市	3	徳島県	3
	金融保険業	26		相模原市	4	香川県	1
	不動産業	10		新潟県	2	愛媛県	4
	サービス業	137		新潟市	2	高知県	1
	情報処理	71		富山県	7	長崎県	1
	合計	367		石川県	3	宮崎県	1
				福井県	2	鹿児島県	3
						合計	158

2023 年度学生による 授業アンケートの結果について

FD 委員会 委員長 日向 良和



前委員長の春日先生が副学長に昇任されたため、2024 年度より FD 委員会委員長を務めさせていただいております日向です。例年の報告となりますが、2023 年度に実施いたしました学生による授業アンケートの結果について報告いたします。

学生による授業アンケートについて

「学生による授業についての学生アンケート」は、大学の自己点検・自己評価活動の一環として、本学における授業内容の改善・向上を目的とし、前期末および後期末授業時間内に受講生が受講している講義に対して、質問項目に回答するという形式で実施している

アンケートです。これらのアンケート結果を元に大学教員自身が講義の内容や講義方法を自己点検し、次年度以降の教育の向上につなげていくことを目的としています。

2023 年度授業アンケート結果について

2023 年度授業アンケートの回答率は専任教員担当科目が 67.6%、非常勤講師担当科目が 75.3% で全体としては 71.9% となっています。2022 年度と比較して全体で 5 ポイントの低下となっています。アンケート回答率の低下は教員の授業の自己点検のための基礎的なフィードバック情報の減少を示すため、2024 年度は回答率の向上のための取り組みが必要です。

2023 年度前期、後期のアンケート結果のスコア（各項目 1～5 点で回答、5 がとてもそう思う、1 は全くそうはおもわない）を見ると、前期、後期共に授業の内容（シラバスに沿っていて学生の事前の期待に応えるものであったか）、講義方法（理解度に沿ったものか、わかりやすかったかという受講してみてもの感想や、双方向の学びがおこなわれていたかなど）、難易度の授業全体の学生からの評価は平均点が 4 点（ややそう思う）を越えており、全体として学生の講義に対する満足度は高いと考えられます。これらの結果は教員の不断の自己研修、FD 活動によるところが大きいと考えられ、今後も 1 回 1 回の講義で学生からのフィードバックを元に次の講義改善につなげることでこの水準を維持していくことが重要です。

また講義を受けた後、学生がそれぞれの分野に対

してさらなる興味をもつような、次につながる講義ができたのかについても、前期後期共に平均スコアは 4 を越えており、各講義が学生の興味関心に応えるだけでなく、その興味を広げるような内容になっていることがうかがわれます。最後に講義内で課題を発見し、それをクラスメートと協働しながら解決できたかについては平均としては 4 を越えています。講義科目やゼミナールのような少人数科目で主に個人での探究が中心となる科目などもあり、他の項目よりはどうしてもポイントが低くなりがちとなるのは科目の特性上致し方ない点もあります。

これらの結果については、各講義担当者にフィードバックされ、次年度以降の講義の振り返りに活用されます。また大学報への掲載や大学ホームページで公開することで、本学の教育活動の状況を学外へ発信しています。それは都留文科大学で学ぶことを「選択」する時の大きな参考資料となると期待しています。

参考資料 都留文科大学に対する大学評価（認証評価）結果より（2021 年～2028 年）

「授業についての学生アンケート」は兼任教員も含めた全教員に呼び掛けて実施をしており、専任教員、

兼任教員ともに非常に高い実施率となっている。アンケート結果は、教員個人への報告を行い、授業改善・向上へとつなげているほか、毎年度『都留文科大学報』において講評を付して公表されている。アンケート

結果における授業評価は上昇傾向にあり、これらの全学的な取組みは、授業改善において成果を上げている。

表 1 2023 年度前期学科別スコア平均

		全 体	学 校 教 育	初 等 教 育	国 文	英 文	地 域 社 会	現 代 社 会	環 境 コ ミ	比 較 文 化	国 際 教 育	文 学 専 攻 科	国 文 学 専 攻	社 会 研 究 専 攻	地 域 社 会 学 地 域	文 学 専 攻 英 米	英 語 専 攻	比 較 文 化 専 攻	実 践 学 専 攻	臨 床 教 育
設 問 評 価 点 (5点満点)	この授業について、週当たりの授業外での平均学習時間はどのくらいですか。	2.58	2.47	2.70	2.65	2.65	2.50	2.67	2.50	2.72	2.66	3.50	3.50	3.21	3.43	2.83	2.75			
	授業の内容は、シラバスに書かれた目標と内容に沿っていましたか。	4.55	4.52	4.74	4.60	4.59	4.47	4.50	4.50	4.59	4.59	5.00	4.00	4.79	4.83	4.70	4.50			
	授業の内容は、わかりやすく、興味深いものでしたか。	4.43	4.45	4.50	4.48	4.48	4.29	4.17	4.50	4.46	4.46	4.75	4.50	4.79	4.87	4.43	4.38			
	授業は、受講者の反応や理解度に応じたものでしたか。	4.35	4.40	4.70	4.36	4.43	4.22	4.33	3.00	4.32	4.37	4.75	4.50	4.79	4.83	4.46	4.38			
	受講者の学習意欲や授業参加を促すための工夫がされていて、双方向の学びが実現されていましたか。	4.30	4.35	4.70	4.30	4.43	4.12	4.50	4.00	4.27	4.33	4.75	4.00	4.79	4.87	4.27	4.38			
	授業のレベル(難易度)は適切でしたか。	4.34	4.39	4.40	4.37	4.37	4.18	4.33	4.00	4.31	4.45	5.00	4.50	4.71	4.70	4.57	4.25			
	あなたは、この授業で理解できなかった点について、どのように対処しましたか。																			
	この授業を履修したことで、この分野の学びについて、興味・関心・意欲をもつことができましたか。	4.31	4.35	4.60	4.27	4.40	4.18	3.83	4.50	4.32	4.40	5.00	4.00	4.69	4.87	4.28	4.38			
	あなたは、この授業で、発見した課題を仲間と共に協働的に探究し、解決する過程を楽しむことができましたか。	4.02	4.24	4.55	3.77	4.23	3.79	3.50	3.00	3.88	4.19	2.75	4.00	4.71	4.83	3.87	4.38			
回答数		15,223	4,233	20	2,788	2,301	2,905	6	2	2,042	790	4	2	14	30	46	8			

表 2 2023 年度後期学科別スコア平均

		全 体	学 校 教 育	初 等 教 育	国 文	英 文	地 域 社 会	現 代 社 会	環 境 コ ミ	比 較 文 化	国 際 教 育	文 学 専 攻 科	国 文 学 専 攻	社 会 研 究 専 攻	地 域 社 会 学 地 域	文 学 専 攻 英 米	英 語 専 攻	比 較 文 化 専 攻	実 践 学 専 攻	臨 床 教 育
設 問 評 価 点 (5点満点)	この授業について、週当たりの授業外での平均学習時間はどのくらいですか。	2.56	2.46	2.07	2.65	2.62	2.42	3.33	3.00	2.81	2.56	2.50	3.33	3.18	3.14	3.20	2.86			
	授業の内容は、シラバスに書かれた目標と内容に沿っていましたか。	4.60	4.59	4.60	4.67	4.65	4.50	4.00	5.00	4.59	4.67	4.50	4.67	4.27	4.86	4.70	4.43			
	授業の内容は、わかりやすく、興味深いものでしたか。	4.51	4.54	4.57	4.60	4.52	4.38	3.67	5.00	4.45	4.54	4.50	4.67	4.50	4.95	4.35	5.00			
	授業は、受講者の反応や理解度に応じたものでしたか。	4.45	4.51	4.53	4.52	4.48	4.28	4.00	5.00	4.35	4.48	4.50	5.00	4.82	4.90	4.20	4.86			
	受講者の学習意欲や授業参加を促すための工夫がされていて、双方向の学びが実現されていましたか。	4.38	4.46	4.53	4.41	4.46	4.20	3.67	5.00	4.30	4.37	4.50	4.33	4.55	4.90	4.20	5.00			
	授業のレベル(難易度)は適切でしたか。	4.44	4.48	4.53	4.52	4.47	4.31	3.33	5.00	4.32	4.47	5.00	4.67	4.45	4.76	4.40	4.71			
	あなたは、この授業で理解できなかった点について、どのように対処しましたか。																			
	この授業を履修したことで、この分野の学びについて、興味・関心・意欲をもつことができましたか。	4.42	4.47	4.60	4.44	4.46	4.29	4.33	5.00	4.34	4.46	4.50	4.00	4.45	4.90	4.50	5.00			
	あなたは、この授業で、発見した課題を仲間と共に協働的に探究し、解決する過程を楽しむことができましたか。	4.09	4.37	4.20	3.87	4.28	3.86	3.33	5.00	3.95	4.22	4.50	4.00	4.55	4.86	3.95	5.00			
回答数		10869	2977	15	1951	1690	2203	3	1	1501	458	2	3	11	21	20	7			

入試状況報告

2024 年度入試を振り返って

入学センター長 新井 仁



一人でも多くの志願者を確保し、意欲溢れる学生に入学して頂くことを目標に掲げて進めてきた2024年度入試について、以下ご報告致します。

10月には総合型選抜が行われました。自分の特性を生かして本学への入学を希望する志願者は164名で前年度より40名増でした。11・12月には一般及びIBの学校推薦型選抜が行われ、志願者は627名で前年度より79名増、さらに大学入学共通テスト利用の学校推薦型選抜は、志願者は126名で前年度より30名増でした。これらの入試における志願者は基本的に本学を第一志望とする学生で、前年度より合計149名増えたことは、本学に魅力を感じ、本学にて学びたいと強く願う学生が増えたことによるものと振り返ります。そして一般選抜では、前期日程志願者数548名で前年度より138名増、中期日程志願者数2387名で前年度より162名増となりました。18歳人口が減少してきている状況において、入試全体で志願者数は前年度より449名増

の3852名を得たことは、大変喜ばしいことです。

合格者に対する入学手続き者数（入学者数）は、前期約51%、中期約56%で、殊に中期は全学科で手続き率が50%を超えました。これはかつてないことで、本学への入学を強く願い、最後まで諦めずに努力した学生が多かったことによる結果だと受け止めています。この結果は、主に「高校訪問や大学説明会、オープンキャンパス等に力を入れて本学の魅力をPRしたこと」、「インターネットやSNS等を活用した広報戦略に力を入れたこと」による成果だと思います。

最終的には、定員730名に対して897名の入学者（留学生を含む）となりました。少々多すぎたことは否めませんが、夢と希望を胸に抱いて本学に入学した学生の充実した学びの実現に応えられる大学づくりに向けて努力し、受験生に選ばれる大学を目指したいと考えています。

総合型選抜			
		志願者	合格者
文 学 部	英文学科	73	43
	学校教育学科	32	14
教養学部	地域社会学科	51	12
	国際教育学科	8	5

学校推薦型選抜			
		志願者	合格者
文 学 部	国文学科	160	59
	英文学科	55	39
教養学部	学校教育学科	172	70
	学校教育学科（共通テスト利用）	55	18
	地域社会学科	120	69
	地域社会学科（共通テスト利用）	39	14
	比較文化学科	84	49
	比較文化学科（共通テスト利用）	18	18
	国際教育学科（IB推薦含む）	36	22
	国際教育学科（共通テスト利用）	14	2

一般 前期日程			
		志願者	合格者
文 学 部	国文学科	92	40
	英文学科	78	54
教養学部	学校教育学科	111	55
	地域社会学科	111	56
	比較文化学科	111	64
	国際教育学科	45	22

一般 中期日程			
		志願者	合格者
文 学 部	国文学科	545	120
	英文学科	342	85
教養学部	学校教育学科	604	141
	地域社会学科	471	103
	比較文化学科	317	82
	国際教育学科	108	24



令和5年度 都留文科大学卒業証書 学位記授与式



令和6年3月22日(金)、午前11時より都の杜うぐいすホールにて、令和5年度卒業証書修了証書授与式を開催いたしました。当日は、3月のうららかな日差しが心地よく感じられるなか830名(学部、専攻科、大学院を含む)がそれぞれの道へ旅立ちました。

加藤学長は祝辞で、「新たな道を切り拓く、社会の課題に取り組むということは、特別な能力のある人や何か高い地位についている人だけが行うものではありません。文大の卒業生として自信と誇りをもって、大学での学びと経験をもとに、現時点では予測できない将来の課題解決に挑戦し、新たな道を切り拓いていくことを願い期待しています。」と述べられました。

卒業生代表の齋藤美空さん(国際教育学科)は卒業生のことばとして、「都留文科大学には、それぞれの意

志を強く持ち、探究意欲にあふれた学生がたくさんいます。在学期にコロナ禍を経験した私たちは、社会、そして自分自身の描いた未来像がわずか数年の間に変化してしまうことの恐ろしさや将来の不確かさを知っています。しかしそれと同時に、長い目で先を見据え、今何をすべきかを見極める力も持っているはずです。私たちの未来には、さらなる挑戦も待っていることと思いますが、これまでの経験がどのような未来においても私たちを支えてくれることを信じて、日々励んでいきたいと思います。」と力強く語られました。

合唱団と吹奏楽部の学生による学生歌「花のかげ」、愛唱歌「都留はユニバース」の演奏で式は終了しましたが、最後まで集合写真を撮り合うなど、別れを惜しむ卒業生の姿が見られました。

令和 5 年度学生表彰について

学生表彰は、学業成績や課外活動において特に顕著な成績を挙げた学生・団体、社会活動において社会的に高い評価を受けた学生・団体に対し、その栄誉をたたえ表彰する制度です。令和 5 年度においては、以下のとおり個人表彰 3 名、団体表彰 3 団体が表彰されました。



種 別	被 表 彰 者	成 績 等 (概 要)
課外活動 (個人)	ゴ エキハン WU YIFAN 比較文化学科 1 年	「第 20 回やまなし留学生スピーチコンテスト」において、第 1 位の成績を修める。
課外活動 (個人)	ゴ ユウシン WU YICHEN 比較文化学科 3 年	「第 20 回やまなし留学生スピーチコンテスト」において、サドヤ賞を受賞。
課外活動 (個人)	カンダ チヒロ 閑田 千尋 学校教育学科 4 年 (女子バレーボール部)	「2023 年度春季関東大学女子 2 部バレーボールリーグ戦」において、敢闘賞及びセッター賞を受賞。 「2023 年度秋季関東大学女子 2 部バレーボールリーグ戦」において、スパイク賞及びセッター賞を受賞。
課外活動 (団体)	都留文科大学 剣道部	「第 72 回関東甲信越大学体育大会」において、女子団体優勝、女子個人 1 位及び 3 位の成績を修める。
課外活動 (団体)	都留文科大学 合唱団	「第 76 回全日本合唱コンクール全国大会 大学職場一般部門 大学ユースの部」において、金賞及び日本放送協会賞を受賞。
課外活動 (団体)	女子 バスケットボール部	「2023 年度 山梨県社会人バスケットボールリーグ」において優勝など。

名誉教授の称号授与

次の2名の教員に対し、これまでの研究活動並びに学内活動などの功績を称え、名誉教授の称号を授与いたしました。



寺門 日出男 教授
国文学科

32年間にわたり本学の教員としてつとめられました。漢文学を担当され、中国思想と日本近世儒学の研究を精力的に進められた中、教務委員長や学生委員長などをつとめられるなど、教育研究のみならず本学の運営に多大な貢献をされました。高校訪問にもご尽力され、出身の秋田県を中心として重要な役割を献身的に務められました。



清水 雅彦 教授
学校教育学科

25年間にわたり本学の教員としてつとめられました。初等教育学科 / 学校教育学科において、音楽科の指導力に秀でた多数の小学校教員を輩出してきたほか、本学合唱団常任指揮者として、全日本合唱コンクール全国大会において12年連続金賞受賞に導くなど、本学の名前を全国に広められました。学長補佐や教務委員長なども歴任され、その人柄や真摯な勤務の様子は教員の模範となりました。

本学発展のため多大な貢献を賜り、誠に有難うございました。

70周年記念事業で活用される ロゴマークおよびキャッチコピーが決定しました！

都留文科大学は、来年2025年に大学創立70周年を迎えます。この大きな節目を迎えるにあたり、記念事業全体のイメージを共有し、より本学に愛着を持ってもらえるようロゴマークおよびキャッチコピーの制作が行われました。ロゴマークとキャッチコピーはイベントや行事のほか、記念グッズ制作など、創立70周年の広報活動で広く活用される予定です。

このロゴマークを活用し、70周年記念事業と一緒に盛り上げていきましょう！

詳細はHPに掲載しています



色とりどりのミライへ。

交換留学生 来日

国際交流センターでは今年度前期、アメリカのセント・ノーバート大学、オーストラリアのタスマニア大学、中国の上海外国語大学、韓国の韓国外語大学のそれぞれから1名ずつ、計4名の交換留学生を受け入れました。4月17日には学長室を訪問し、自己紹介と都留での留学に対する抱負を語りました。

長年日本語を学んだ後、念願の初の渡日であり毎日を充実させたいという学生、主専攻である日本語はもちろん、自身の大

学で専攻している国際関係や日本の外交などの学びも深めたいという学生、すでに都留文科大学の部活動に参加し日本人学生との交流を楽しんでいる学生など、それぞれが目標や夢を持ち都留で学んでいきます。

加藤学長からは、富士山に近い自然豊かな環境に囲まれ、地域の人とも近いという特性のある都留文科大学ならではの学びをしてもらいたい、日本人の学生や地元の人との交流も楽しんでもらいたい、と、応援のメッ

セージをいただきました。

半年間の都留での留学生活、沢山の出会いと経験をし、それぞれにとっての成長の機会になることを期待しています。



第55回つる子どもまつり開催



5月12日に、「第55回つる子どもまつり」が行われました。つる子どもまつりは、今年で55回目を迎えた子どものためのおまつりで、一昨年は厚生労働大臣表彰もいただいた歴史ある地域活動の一つです。今年の目標は、「全員の積極性を引き出す子どもまつり」でした。インターネットの使用率向上に伴い、周囲とのつながりの希薄化、自己主張が苦手な子が増えているため、子どもたちが周囲の人たちと仲良く楽しくできるようなあ

そびや文化を体験できるよう、実行委員会では半年間、計画を練ってきました。

当日は天気も良かったため、昨年できなかった外遊びもすることができ、開閉こく式も赤の広場で行うことができました。また各団体が1号館に「くに」と呼ばれるブースを出しました。職人さんとかうさく遊びができる「こさくのくに(職人会)」や昔のことば遊びができる「ことばのくに(都留詩友会)」など地域団体が出しているくにや、「カンボジアのくに(カンボジア支援サークル Plenty)」や「ぷらっと

はうすのくに(ぷらっとはうす)」、「じゃずのくに(都留JAZZ倶楽部)」など学内団体のくに、さらに地域団体外からも慶應義塾大学のOBOGの方々が「慶應のにんぎょうのくに」を出しました。

180人を超える子どもたちが遊びに来てくださり大盛り上がりを見せました。来年も5月に開催できるよう、これからも活動を続けていきたいと思います。

第55回つる子どもまつり実行委員会

実行委員長 菅木 翼愛



春季オープンキャンパス実施報告



5月18日(土)に春季オープンキャンパスを実施いたしました。春季オープンキャンパスでは、対面を基本としつつも、学科説明会についてはオンラインを併用しハイブリッドでの開催にすることで、遠方の方にも気軽にご参加頂けるようにいたしました。今回オンラインにてご参加頂いた皆様も、是非夏のオープンキャンパスには本学へお越し頂き、自然豊かな環境や、本学が誇る人の魅力を直に知っていただければ大変嬉しく思います。

オープンキャンパスにご参加頂いた方の総数は702名であり、実際にご来場頂いた方が595名、オンラインでのご参加が107名となりました。昨年は新しい校舎THMCの完成や、コンビニが学内にてオープンするなど、施設の拡充も進んでお

ります。本学の、歴史ある建物から最新設備まで様々な環境をご覧頂くことで、入学後の生活が具体的に想像できたのではないかと期待しております。事後のアンケートでも「自分が学ぶ像が見えた」「歴史と共に変化変革を感じました」といった声をお寄せいただきました。また、本学の短期留学制度プログラムや、図書館司書・社会調査士といった資格にも興味を持って頂けたようです。事後アンケートに答えて下さった方のうち、本学を第一志望としてくださっている方の割合は76%であり積極的な質問を多数頂けたことにつきましては、我々も大変ありがたく思っております。当日は過去問配布や、個別相談会での入試相談もありましたので、安心して本学の志願へつなげて頂ければ嬉しく思います。

都留文科大学では、本年度から副専攻という新しいカリキュラムが始まりました。今までにない分野横断型の幅広い学びが本学で実現します。また、来年には地域交流を進める新しい建物が竣工予定となっており、地域に根差した研究やフィールドワークをこれまで以上に推進してまいります。さらに本学は2025年に創立70周年を迎えます。都留文科大学が立ち止まることなく、未来に向かって発展していく姿を、今後ともお伝えできるよう邁進してまいります。

最後になりますが、春季オープンキャンパスの準備・運営に快くご尽力いただきました、教職員・学生スタッフ・広報委員会の皆様、誠にありがとうございました。

広報委員長 吉岡 卓



「クロスボーダー・プロジェクト」を開催しました

令和6年5月11日(土)に本学学校教育学科 堤英俊教授と山本剛特任教授を主体とした「クロスボーダー・プロジェクト」(通称「クロボ」)が開催されました。参加者25名、学生ボランティア29名が参加しました。

第1回は都留文科大学体育館でダンス、フロアホッケー、フロアボール、午後からは大学美術棟でアート活動(シャボン玉アート)を行いました。今年度はあと5回実施する予定です。今後の日程や活動の詳細は大学HPからもご覧いただけます。



「キャリアデザインワーク」を開催しました



令和6年5月11日(土)に「キャリアデザインワーク」が開催されました。(今年度は全6回開催予定) 本学学校教育学科 佐藤比呂二特任教授を主体として、校内で大学生や地域の方々とともに「働くこと」についての講座やコミュニケーションワーク、市内の協力事業所に分散して職場体験を行う予定です。第1回は名札づくりや例年好評のCUPS(カップス)の活動や、「自己紹介すごろく」を通してお互いのことを知り、仲良くなることができました。

「ボランティアひろば」を開催しました

「ボランティアひろば」を4月25日(木)、5月16日(木)に開催いたしました。6月以降も月に1~2回お昼休みの時間に開催する予定です。ボランティアについて学ぶことや、地域のボランティアニーズの紹介や募集のお知らせ、ボランティア体験者の講話、短時間に体験できる活動などを計画しています。

4月は「ボランティアひろば」の紹介や都留市社会福祉協議会の紹介とお知らせ、5月は楽山区のごみ拾い清掃活動を実施いたしました。



令和6年度人事異動等について

教 員

【採 用】(令和6年4月1日付)

石 垣 千 秋 (教養学部地域社会学科教授)
小 室 龍之介 (文学部英文学科准教授)
横 山 美 和 (教養学部比較文化学科准教授)
関 東 曄 (教養学部比較文化学科准教授)
畠 山 勝 太 (教養学部国際教育学科准教授)
田 開 寛太郎 (教養学部地域社会学科准教授)
島 崎 治 子 (語学教育センター准教授)
陳 佑 真 (文学部国文学科講師)
藤 井 翔 太 (教養学部国際教育学科講師)
清 水 雅 彦 (教養学部学校教育学科特任教授B)
藤 田 康 郎 (教職支援センター特任教授B)
神 山 英 子 (語学教育センター特任准教授B)
大 石 太 (教職支援センター特任准教授B)
藤 島 綾 (文学部国文学科特任講師B)
泉 宜 宏 (教職支援センター特任教授C)

【退 職】(令和6年3月31日付)

寺 門 日出男 (文学部国文学科教授)
邊 英 浩 (文学部比較文化学科教授)
清 水 雅 彦 (教育学部学校教育学科教授)
田 中 昌 弥 (文学部国際教育学科教授)
山 辺 恵理子 (文学部国際教育学科准教授)
黒 川 智 史 (文学部英文学科講師)
小 室 龍之介 (文学部英文学科特任准教授A)
青 木 宏 希 (地域交流研究センター特任教授B)
泉 宜 宏 (教職支援センター特任教授B)
村 上 憲 司 (教職支援センター特任教授B)

【昇 任】(令和6年4月1日付)

堤 英 俊 (教養学部学校教育学科教授)
木 下 慎 (教養学部国際教育学科准教授)
宮 城 スサナ (語学教育センター特任教授B)

【学外研究】

早 野 慎 吾 (文学部国文学科教授)
富 永 貴 公 (教養学部地域社会学科准教授)
Karl Johan Nordstrom (教養学部国際教育学科准教授)

事務職員

【転 任】(転出)

市民部 市民課 課長
横 瀬 晴 紀 総務部 企画課 参事
福祉保健部 長寿介護課 課長
小 澤 初 美 総務部 企画課 参事
市民部 地域環境課 主幹
久保田 昌 宏 総務部 企画課 参事
福祉保健部 健康子育て課 主幹 (兼) 課長補佐・
子育て包括支援室長・こども家庭センター長・少子化対策監
山 本 香 栄 総務部 企画課 主幹
市民部 地域環境課 主幹 (兼) 課長補佐・環境政策室長
志 村 高 男 総務部 企画課 主幹
総務部 企画課 主査
藤 江 毅 総務部 企画課 主査

市民部 市民課 主任
津久井 陽 美 総務部 企画課 主任
市民部 税務課 主任
照 屋 奈 智 総務部 企画課 主任

【転 任】(転入)

総務課 課長
程 原 由 和 市民部 市民課 課長
経営企画課 課長
小 俣 昌 寛 市民部 地域環境課 主幹 (兼) 課長補佐
(富士・東部広域環境事務組合)
学生支援課 課長
相 川 薫 教育委員会 学校教育課 主幹 (兼) 課長補佐・
教育首都つる推進監
総務課 主幹 (兼) 課長補佐
鈴 木 いづみ 福祉保健部 健康子育て課
主幹 (兼) 課長補佐
教務課 主幹 (兼) 課長補佐
清 水 友美子 福祉保健部 長寿介護課 主幹 (兼) 課長補佐・
高齢者支援室長 (包括支援センター長)
経営企画課 副主査 情報センター担当
蛭 間 将 太 市民部 税務課 副主査
総務課 主任 庶務人事担当
中 野 遥 香 総務部 総務課 主事
総務課 主任 図書館担当
渡 邊 祥 子 総務部 総務課 主任
【昇 任】
総務課 主査 財務法制担当
都 倉 一 憲 総務課 副主査 財務法制担当
総務課 主査 図書館担当
松 尾 陽 子 総務課 副主査 図書館担当
教務課 主査 国際交流センター担当
佐 藤 絵 美 教務課 副主査 教務担当
総務課 副主査
栗 賀 暁 総務課 主任
教務課 副主査 教務担当
渡 邊 誠 大 教務課 主任 教務担当
総務課 主任 財務法制担当
飯 沼 章 総務課 主事 財務法制担当
経営企画課 主任 企画広報担当
天 野 麻 由 経営企画課 主事 企画広報担当

【配置換え】

経営企画課 主査専門職員 地域交流担当
小 林 美貴子 教務課 主査専門職員・教職担当
教務課 主査専門職員 教職担当
谷 内 正 美 経営企画課 主査専門職員・地域交流担当

【採 用】(令和6年4月1日付)

教務課 主事 教務担当 笠 井 優 華
学生支援課 主事
キャリア支援センター担当 宮 澤 結
学生支援課 専門職員
チーフキャリアアドバイザー 舟久保 薫

最初の一年を終えて

学校教育学科 菊地 優美

四月の帰り道、大学を背にして見える都留の山並みが、山桜の桜色や新緑の淡い緑色で春の柔らかな色合いに姿を変えていることに気づきました。昨年本学に着任し、春の都留の風景を見るのは二度目のはずですが、昨年は新しい授業や都留文科大学について知ることで頭がいっぱいだったようで見覚えがなく、今年目にした春の山並みは、初めて出会ったように印象深い風景として心に残りました。

本学での時間を重ねるにつれ、少しずつ季節ごとの風景の移り変わりにも目を向けられるようになりました。この一年で思わず写真を撮らずにいらなかったのは、一月の朝、大学の向こうに見える山々が早朝の寒さで凍りついて白銀におおわれた姿でした。雪が降り積もったわけでもなく、山が白く凍りつくということを都留に来て初めて知りました。

その一月は、初めて受け持ったゼミ生たちがなんとか卒業論文を書き上げ、ほっとしていた頃でした。本学での最初の役割の一つとして広報委員を仰せつかってからももう少しで一年というところで、この学報では「卒業論文・研究論文・修士論文一覧」の掲載に向けて準備が進んでいました。三月に受け取った本誌では、私にとっ



1月、白く凍りついた都留の山

て初めて送り出す四年生を含めた卒業生や修了生の論文題目が掲載され、大変感慨深い気持ちで眺めました。卒業式の前日には、研究室を訪れる四年生たちに卒論を書き上げた達成感を味わってほしいと思い、一人いそいそと学生の目に入りそうなところに題目一覧のページを開いて貼り出しました。

一年間、広報委員として編集過程を拝見しながら、学報は学生のみなさんが日々の大学生活や教育実習、留学、部活動などの様々な活動の場でどのように努力を重ねているかを、その人自身の言葉を通じて知ることができる貴重な場だと感じています。先生方の研究や教育への思いを垣間見られることも学報の魅力の一つです。新しく始まった今年度もまた、本誌を通じて学生のみなさんと先生方の言葉に触れられることを楽しみにしています。

ぶんだい堂

三蘇蜀学の研究
北宋士大夫による儒家經典解釈の展開



陳 佑真 著
2024年3月発行
京都大学学術出版会

◇陳 佑真
国文学科 講師

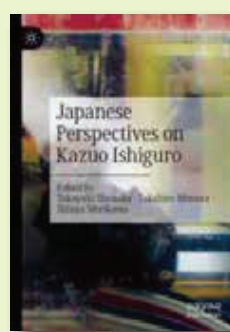
アメリカ哲学入門
ナンシー・スタンリック 著



藤井 翔太 訳・解題
2023年9月発行
勁草書房

◇藤井 翔太
国際教育学科 講師

Japanese Perspectives on
Kazuo Ishiguro



莊中孝之・三村尚央・森川慎也(共) 編
加藤めぐみ 他 執筆
2024年1月発行
Palgrave Macmillan
◇加藤 めぐみ
英文学科 教授

計 報

令和6年6月4日(火)、名誉教授 安宅 正路氏のご逝去されました。
ここに先生の生前の御功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。



公立大学法人
都留文科大学
〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1
☎ 0554-43-4341
URL: <https://www.tsuru.ac.jp/>

都留文科大学報 第155号 2024年7月8日発行

都留文科大学広報委員会

吉岡卓(委員長)・日向良和(副委員長)・加藤浩司・加藤めぐみ・堤英俊・菊地優美・小島恵
上野貴彦・原和久・安富博史(企画広報担当)・大輪知穂(IR担当)・舟久保薫(キャリア支援センター
担当)・天野麻由(企画広報担当)・奥脇開斗(企画広報担当)